連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第⑳回

寺脇研 氏（元・文科官僚、京都芸術大学教授）
――いま芽吹いた生涯学習&ゆとり教育

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

寺脇研氏近影

▼ゆとり教育のねらいのエフェクト

藤井聡太（2002年7月19日生）、大坂なおみ（1997年10月16日生）、反田恭平（1994年9月1生）、大谷翔平（1994年7月5日生）…。活躍する日本の若者。個性を生かし自らの興味と能力を発揮している。そしてプロとして生きる。好きなことへの選択と集中の結果である。同時に、それには、それには、いわゆる学校では得られないところでの努力を行っているのだろう。また、家庭の理解や後押しがあったはずである。こうした若者が、コロナがはびこるいまの時代に元気を与えてくれている。

元気は、未来を見つめることにより生まれる。若者には、確かに時間がある。が、現代を生きているすべての人々が共通して持つべき空気感が「未来」であり、いま風に言えば「持続可能性」である。確かに、SGDsの選択肢には、そうした希望をつくり出す糸口がある。少子高齢化は、従来から課題とされており、社会改革が志向されてきた。例えば、第4次臨時教育審議会（臨教審）では、生涯学習の推進が答申された。1987年8月、いまから34年も前のことである。

その方針に従い、教育改革が行われた。学校週5日制も導入された。1992年からで、当初は月1回だけだったが、2002年からは完全週5日制となった。そして、土曜の授業時間が月～金に振り向けられていた総授業時間数を減らす政策が実施された。それは、授業時間数が減ると学力低下になるとの見方や土曜の休校時の生徒の過ごし方などへの環境整備が問題となったこともあり、「ゆとり教育」との批判が先行し、一部においては破綻した。こうした教育改革は、国の制度改革であるが、国民の理解―社会受容性―の支持が重要となる。同じ臨教審で進められたのが、生涯学習の推進である。これは、放送大学の設置や通信制教育の導入などである。放送大学は、1985年の学生募集から36年を経過して、社会受容性が獲得され、多くの通信制高校や大学、あるいは大学院が普及している。

そうした中に、新型コロナウイルス蔓延が起り、そのニーズが高まっている。この局面に文部省や文科省の教育行政の立案、法律作成、教育現場対応、国民へのPRなどをおこなって来られたのが、本コラムで今回、紹介する寺脇研氏である。新機軸の行政&施策には、喜びも苦労も、そして大きな苦労や挫折もあったという。まさに、「挑戦者の履歴書」にはふさわしい方であり生き様であると思い、ここで紹介したい。

▼寺脇氏との関わり

まず、筆者と寺脇氏との関わりは何だろうと、誰もが疑問に思われたであろう。まずそれを明らかにしておく必要がある。それには、呼び水となった方がいた。いまから13年ほど前、福島県立相馬高等学校の理科や情報教育の担当教諭、高村泰広氏がその人である。高村氏は、同校で2004年度から始めたSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の企画者のひとりであり、そのプロジェクト実践者であった。筆者は当時、風力発電について研究&発信していたので、SSHの生徒たちの希望で風車を課題にすることになり、高村氏とともに生徒たちが、筆者の勤務先の千葉大学での研修授業に、やってきた。また筆者の研究生の大学院生らも相馬高等学校に出掛けて講義を何度か行った。2011の東日本大震災の前年の夏、8月末の暑い日には、日本技術史教育学会の行事を相馬高校で行うなども行った。その高村氏は活動的教師で、SSHや総合の学習の時間においても先導的な取り組みを行っていた。その関わりで寺脇氏とも関係があったのである。こうして高村氏を通じて寺脇氏と縁がつくられた。ほかにも、文科副大臣だった鈴木寛氏、通信教育の星槎学園の宮澤保夫氏などとも交友できたのだった。

私も遠慮のない方なので、寺脇氏には、2012年と13年に、千葉大学での筆者の担当科目の「科学技術と現代社会」という講義をお願いした。この科目の対象や分野は広いので、現在東京都知事をされている小池百合子氏（衆議院議員時代）や加藤紘一氏（衆議院議員、元自民党政調会長）、鈴木寛氏（文部科学副大臣）などからも講義して頂いた。

寺脇氏の講義は、2012年（今から9年も前である）に、『ゆとり教育（地域が支える教育と文化形成）』をテーマとしてお願いした。実はこの年度は、寺脇氏が進めてきた、いわゆる「ゆとり教育」を小学1年から中学卒業までフルにやってきた生徒が、千葉大学の学生となって目の前にいるという記念の年であった。講義では、そうしたやり取りを寺脇氏と受講生と意見交換するシーンもあった。

次の2013年度は、『映画についての評論』として講義して頂いた。このタイトルでは、寺脇研企画・監督で製作した『戦争と一人の女』の映画の一部予告も含めて行われた。大学生には刺激が大きかったかもしれない。その後、筆者は自主映画企画として千葉市生涯学習センターで、『戦争と一人の女』の上映会を行った。これには、一般市民が約80人参加した。これは、会場の名前にあるように生涯学習としての切り口で、上映後、会場内で寺脇氏のトークセッションも設け参加者と意見交換を行った。

さらに、千葉県茂原市のライブスタジオでは、筆者の主宰している「上総まちなか大学院」の講座として、寺脇氏に『22世紀をデザインする』と題してお願いした。いまからちょうど4年前のことで衆議院議員選挙があり、高校生も投票する初めての国政選挙であったので、市民による未来をつくる民主政治には選挙で投票することが大事であると、参加した高校生に向けても語ってくださった。

▼寺脇氏の職務歴

寺脇氏の経歴は、筆者の手持ちの著書【註1&2】の巻末にも書かれているが、『官僚批判』の本文には時系列的に氏の行って来られた職務について意見とともに書かれている。それから拾い上げると以下のようになる。

1952・7・13、福岡市生まれ／71・3、ラ・サール高校卒業、75・3、東大法学部卒業　75・4～文部省初等中等教育局教科書管理課〈初任先〉76～検定課／78・10～大学局高等教育計画課〈「放送大学学園法」作成〉／79・4～大学局高等教育計画課法規係長〈国会答弁割り振り〉／81・4～大臣官房総務課審議班審議第二係長〈行財政改革審議〉／81・9～総理府臨時行政調査会事務局係長〈中曽根臨教審設置で省庁協議〉／83・4～文部省大臣官房総務課審議班審議第二係長〈土光臨調の文部省側担当窓口〉／84・4～福岡県教育庁指導第二部指導第二課長〈少中学校学校教育・福岡県職員として注力〉／86・4～文部省高等教育局私学助成課課長補佐〈充電期間〉／88・4～社会教育局社会教育課課長補佐〈生涯学習の時代に布石〉／88・7～生涯学習局生涯学習振興課課長補佐〈リクルート事件記者会見〉〈第一回全国生涯学習フェスティバル〉〈生涯学習振興法〉〈人脈形成〉／92・7～初等中等教育局職業教育課長〈業者テストの廃止に対応〉／93・12～広島県教育委員会教育長〈高校入試制度改革〉／96・4～文部省高等教育局医学教育課長／97・6～生涯学習局生涯学習振興課長／99・4～大臣官房政策課長／2001・1～文科省審議官（生涯学習政策局）〈「ゆとり教育の旗振り役」〉／2002・8～文化庁文化部長／06・4～文科省大臣官房広報調査官／06・11～退官／07・4～京都造形芸術大学（現、京都芸術大学に改称）教授、現在に至る。

▼生涯学習の促進に注力&専門家

今回、コラムを書くにあたり、寺脇氏に、リアルに会ってインタビューを行った（**写真**）。

筆者の関心は、エリート教育を受けて文部官僚になり、いわゆる「ゆとり教育」に注力された背景にであった。いろいろの意見交換ののち、この話題について質問すると、明確に、官僚の仕事の中で自身の取り組みとして見出したのは、「生涯学習」に関わってからであると答えてくださった。

なるほど、紹介した著書【**註1**】を読み込むと、明確に理解できる。しかも冒頭に既述したように、それを行政として遂行するには困難もあるが、人生を賭してもやるべき意義を見出したと書かれている。それを今回は肉声でも聞くことができた。世間の「ゆとり教育」についての批判は近視眼的であったが、筆者はその重要性や価値について体験を通して感じてきた一人である。というのは、筆者は、地方の工業高校を卒業し首都圏に集団就職し、2年後には、国立大学に就職しながら夜間大学を卒業し大学院を終え、学位を取得し、大学に勤務し、社会人教育も範疇にした昼夜開講制の授業を担当してきた身でもあるからである。寺脇氏が法制化に関わった放送大学には、知人同僚も関わり、配偶者となった者も、従来の大学を卒業したのちも、放送大学のコースや大学院を何度も就学・修了を繰り返している。

寺脇氏の著書に、以下の文言が、生涯学習を推進する趣旨として引用記述されている。

「我が国が今後、社会の変化に主体的に対応し、活力ある社会を築いていくためには、学歴社会の弊害を是正するとともに、学習意欲の新たな高まりと多様な教育サービス供給体系の登場、科学技術の進展などに伴う新たな学習重要の高まりにこたえ、学校中心の考え方を改め、生涯学習体系への移行を主軸とする教育体系の総合的再編成を図っていかなければならない。」

この文言は、長くわかりづらいが、「社会の変化」「活力ある社会」「学歴社会の弊害」「学習意欲の新たな高まり」「多様な教育サービス供給体系」「科学技術の進展」「新たな学習重要の高まり」「学校中心の考え方を改め」「生涯学習体系への移行」など、今日のあり様を見据えた記述があり、その推進が現実化されている。さすがに、コロナや東京一極集中や地方の疲弊については明言されてはいないが、行間としては読み解くことができる。すなわち、法整備としては秀逸で、いちいち立法しなくとも行政として臨機応変に措置できる教育の改革の指針となっている。

このように、教育の体系化は、20年、30年先の目線で、案件によってはさらに長い目線で立法して欲しい。

▼まとめ

筆者は、コロナ禍で千葉県の夷隅（中房総）地域に住んでいるが、いま千葉県農業普及センターが、夷隅地区で、小規模アグリビジネスを高齢者向けに講習会として行っている。その内容は無理がなく無駄がなく楽しみながら行えるように、息子のような世代の農業普及指導員が指導してくれる。この講習会も生涯学習&教育であり、好例としてここで紹介したい。

冒頭に名前を上げたのは、最近、話題になった方々で、3人とも特別裕福な生い立ちではない。ごく普通の家庭の出身で、自分の道を追い求めたのであった。その選択は、これまでの真面目に学校に通い、画一的な教育を受けるというのではない。そうした教育に新しく風通しを与えたのは、「ゆとり教育」といわれていた改革であった。繰り返しになるが、今回紹介した寺脇研氏は、文科省官僚として、まさにこの「ゆとり教育」について企画し、普及推進してきた張本人であった。寺脇氏が、努力しあるいは挫折した官僚機構は、巨大組織であり一辺倒には構想が実現しなかったが一里塚としては標された。それは、次のステップへの布石として有益なエフェクトとなったと筆者は感謝し慰労したい。

寺脇氏の意見を伝える著作品（一部）

【註1】寺脇研、『官僚批判』、講談社（2008年）。

【註2】寺脇研、『官僚批判』、講談社（2008年）それでも、ゆとり教育は間違っていない』、扶桑社（2007）。